第 13 回金沢自転車ネットワーク形成に向けた勉強会　開催記録

◆「第 13 回金沢自転車ネットワーク形成に向けた勉強会」を 11 月 25 日（土）に開催しました。
◆会場開催に加え、オンライン配信も実施し、県内外から多くの方にご参加いただきました。
◆基調講演や先進事例報告、金沢での取組事例の報告、パネルディスカッションでの意見交換を行いました。

・開 催 日：令和 5 年 11 月 25 日（土）13:30～17:00（受付開始：13:00）
・会　　場：石川県文教会館 401･402 会議室（大会議室）
・主　　催：金沢自転車ネットワーク協議会
・参加者数：69 名（オンライン参加 21 名、会場参加 48 名）
・プログラム：

1）開会 ・公立小松大学 教授　**髙山 純一**（金沢自転車ネットワーク協議会 会長）	13：30 ～13:35
2）【第一部】基調講演・金沢での取組報告（100 分） （1）基調講演：「地域（まち）における自転車の活用 ～都市環境・健康・観光まちづくり・安全～」（60 分） 講師：自転車活用推進本部事務局次長 森若 峰存（国土交通省道路局参事官） （2）金沢での取組報告（40 分） 発表者：国土交通省 金沢河川国道事務所 計画課、石川県 道路整備課 金沢市 交通政策課、石川県警察本部 交通企画課	13：35 ～15:15
3）休憩（10 分）	15:15 ～15:30
4）【第二部】パネルディスカッション（85 分） <テーマ>「将来における望ましい交通のあり方 ～自転車と公共交通の目線で～」 コーディネーター：北陸大学 名誉教授　三国 千秋（金沢自転車ネットワーク協議会 委員） コメンテーター　：自転車活用推進本部 事務局次長 森若 峰存（国土交通省道路局参事官） 公立小松大学 教授　髙山 純一（金沢自転車ネットワーク協議会 会長） パネラー　：北陸鉄道株式会社 常務取締役 企画開発部長　加藤 大勝 地球の友・金沢　三国 成子（金沢自転車ネットワーク協議会 委員） 金沢市 都市政策局 交通政策課長　近藤 陽介	15:30 ～16:55
5）閉会 ・国土交通省 北陸地方整備局 金沢河川国道事務所 所長　**桑島 正樹** （金沢自転車ネットワーク協議会 事務局）	16:55 ～17:00

▼【第一部】基調講演（自転車活用推進本部　森若 峰存 事務局次長）

・「地域（まち）における自転車の活用～都市環境・健康・観光まちづくり・安全～」と題して、これまでのご経験を踏まえた現場の大切さ、まちづくりの視点での自転車施策の重要性についてお話しいただきました。

◇大切な点は「地域の特色」と「現場の工夫」であり、地域の実情を踏まえて、関係者が創意工夫して自転車利用環境整備に取り組んでほしい。

◇「安全で快適な自転車利用環境創出ガイドライン」を改定中であるが、なかなか自転車道や自転車通行帯の整備が進まない現状を踏まえて、道路空間の再配分の具体例を示し、分かりやすくするように配慮しています。

▼【第一部】金沢の取組①（国土交通省 金沢河川国道事務所 武藤 保全対策官）

・「金沢自転車ネットワーク協議会での取組　～デンマーク式自転車教室の実践～」と題して、金沢自転車ネットワーク協議会で取り組んでいる、デンマーク式自転車教室の取組についてご発表いただきました。

◇金沢事故対策研究会では、事故データの集計分析による安全対策、自転車交通安全教育について研究、実践しています。

◇金沢では、未就学児に対する教育が不足していることから、京都市の事例を参考にデンマーク式自転車教室を実践したところ、参加者や関係者から高評価を得ることができました。

◇引き続き、自転車通行空間の正しい使い方を研究するとともに、自転車教室による新しい交通安全教育を実践していきます。

▼【第一部】金沢の取組②（石川県 土木部 道路整備課　大代 専門員）

・「いしかわ里山里海サイクリングルートについて」と題して、石川県が取り組んでいるサイクルツーリズム関連施策についてご発表いただきました。

◇石川県では、「いしかわ里山里海サイクリングルート」を指定し、サイクリング環境の整備に取り組んできました。

◇今後、国が指定するナショナルサイクルルート選定を目指し、路面表示や案内看板の整備、利用促進に取り組んでいます。

◇北陸３県の連携によるスタンプラリーの開催、サイクルトレインのトライアル運行などを実施しており、引き続き自転車利用環境整備を推進していきます。

▼【第一部】金沢の取組③（金沢市 都市政策局交通政策課　谷津 主査）

・「金沢市における自転車活用推進に向けた取組」と題して、金沢市の自転車施策全般についてご発表いただきました。

◇金沢市では、令和２年３月に「金沢市自転車活用推進計画」を策定し、「はしる」「とめる」「まもる」「いかし ひろめる」のそれぞれについて、自転車施策を推進しています。

◇「いかし ひろめる」に関連する、金沢市公共シェアサイクル まちのりについては、IR いしかわ鉄道との連携による割引プランの販売、モニターツアーの開催などの各種利用促進を図り、年間目標利用者数 10 万人のところ、令和４年度は 25 万人に利用いただいています。

▼【第一部】金沢の取組④（石川県 警察本部 交通企画課　窪 課長補佐）

・「自転車乗車時のヘルメット着用について」と題して、石川県内でのヘルメット着用状況や着用促進に向けた取組についてご発表いただきました。

◇令和５年４月から、自転車乗車時のヘルメット着用が努力義務化となり、石川県警察のマスコットキャラクターのいぬわし君も、ヘルメットを着用するようになりました。

◇県内のヘルメット着用率は２割程度であり、着用を妨げる理由としては「髪型がくずれる」「恥ずかしい」「持ち運びが大変」などの意見が出ています（高校生調査より）。

◇警察としてはヘルメット着用モデル校を指定し、ヘルメットを贈呈する等の取組も行っており、引き続き着用促進を図っていきます。

▼【第二部】パネルディスカッション①（金沢市 都市政策局 交通政策課　近藤 陽介 課長）

◇金沢市では、令和５年３月に「第３次金沢市交通戦略」を策定し、「歩行者・自転車・公共交通優先のまちづくり」「交通から暮らしの質やまちの魅力を高めるまちづくり」を目指し、取組を進めています。

◇まちのりについては、第３期に向けて、あり方検討委員会を開催しており、まちなかの魅力を向上させる交通手段として、自転車 700 台、ポート 100 箇所に規模を拡大し、第３期中には自転車 1,000 台、ポート 120 箇所程度まで拡大することを想定しています。

▼【第二部】パネルディスカッション②（北陸鉄道株式会社　加藤 大勝 常務取締役、企画開発部長）

◇公共交通と自転車が繋がるこれからの街づくりについて、３つのアプローチが考えられます。

①公共交通と交通空白地域を結ぶ自転車

②輸送力が不足している公共交通を補完する自転車

③公共交通と走行環境を共有する自転車

◇自転車利用者からは、バスはゆっくり走る乗り物と思われていますが、たくさんの乗客を乗せている公共交通であることを理解いただいたうえで、道路上ではバスにも配慮した自転車の走行をお願いします。

▼【第二部】パネルディスカッション③（地球の友・金沢、自転車ネットワーク協議会　三国 成子委員）

◇日本は、交通・環境・まちづくりが並列に扱われることが多いが、ヨーロッパでは、環境やまちづくりに包含されるものとして交通が扱われており、考え方が大きく異なります。

◇また、ヨーロッパでは自転車のように体を動かす「アクティブモビリティ」の重要性が示されており、QOL（生活の質）の向上に寄与しています。

◇地方の公共交通は危機的な状態にあり、地元の地域でも路線バスが廃止され、オンデマンドバスが運行するようになりました。学びの機会として、バス試乗会を企画し、実際に乗ってもらうことでバスの利用促進も図っています。住民参加を促すためには、現状を正しく伝えて自発的な行動に結びつけることが大切です。免許返納前でも、今あるオンデマンドバス利用をしないと将来なくなる

可能性がある事を伝えると、自らバスに乗り、しかも楽しい企画を考えて参加するようになりました。

▼【第二部】パネルディスカッション④（コメンテーター）

⇒公立小松大学 髙山 純一 教授：

・金沢市の第３次交通戦略は良い計画になっているが、どのように実践していくかが課題だと思います。バスは天候によって需要のバラつきが大きく、雨の日は乗れない乗客もいるため、連接バスを運行するなどして、乗車可能者数を増やしていくことも考えられます。

・都市部では当たり前だが、金沢市民は乗り換えに対する抵抗感が大きいため、今後モビリティハブの重要性が高まると感じています。

⇒自転車活用推進本部 森若 峰存 事務局次長：

・スマートクルーズとして、高級で速い自転車を乗りたいという需要も高いため、多様なニーズに対応したレンタサイクルを実施していくことも考えられます。

・サイクルトレインも含めて、自転車と公共交通との連携がより大胆に進めば良いと感じています。

▼【第二部】パネルディスカッション⑤（北陸大学 三国 千秋 名誉教授）

◇金沢市では、人口減少、老年人口の増加、街中の駐車場増加、公共交通利用者の減少などの様々な課題があります。このようなデータをみると①現状維持型と②政策推進型の２パターンのシナリオがあると感じています。

◇公共交通は、単なる移動手段ではなく、まちづくりや福祉、環境などの色々な分野に大きく影響を与えるインフラであり、海外では公共交通単体で採算をとるという発想自体がそもそもありません。

◇金沢市の自転車施策においても、これまで「連携と協力」「市民参加」「モニタリング」を続けており、これが成果につながっているため、公共交通についても、市民による協力・支援がカギを握ると考えています。

⇒金沢市 都市政策局 交通政策課　近藤 陽介 課長：

・計画を策定する中で様々な方から意見を聞きましたが、同じ当事者としてこの街をどうすればよくできるのかを、一緒に考えるのが重要と感じています。交通事業者と行政、市民が対立する関係ではなかなかうまくいかないと思います。現状では、100 は無理だが、50 であれば可能など、歩み寄った対話が必要と感じています。今回の勉強会のように、関係者が意見交換できる場は非常に重要であり、今後の業務の参考にさせていただきたいと思います。

⇒北陸鉄道株式会社　加藤 大勝 常務取締役、企画開発部長：

・相互理解と対話が重要と感じました。少子化による利用者数減、運転手不足が大きな課題であり、これが続くと公共交通は縮小均衡に陥ると考えています。自家用車に依存するのではなく、アクティブモビリティも活用しつつ、公共交通とも更なる連携が必要と感じています。

⇒地球の友・金沢、自転車ネットワーク協議会　三国 成子委員：

・金沢のまちなかの価値や魅力を再認識するべきだと感じています。最近では、買い物も街中ではなく、郊外に行くようになってしまい、街中の空洞化が進んでいると感じています。

・一方で、インバウンド客は増えており、金沢の街並みや食、文化に人が集まっているため、市民も金沢市の魅力を再認識して、街中に来たくなるような魅力を作り、情報発信していくことも重要と感じています。

⇒自転車活用推進本部 森若 峰存 参事官：

・今回の勉強会で、様々な動きがあることを改めて実感できました。これまでコロナ禍で自治体の方々と話すことができなかったため、今後は意見交換をしながら進めていきたいと感じています。

⇒公立小松大学 髙山 純一 教授：

・金沢市は、同規模の地方都市に比べるとバス交通は充実していると感じています。今後は人口減少も進むが、観光客が増加すれば街中の交通は維持できると思われる一方で、郊外のバス路線の減少が心配なところです。住んでいて良いと感じる街は、鉄道、バス、シェアサイクルなど、多様な移動手段を利用して、好きな時に好きなところに行けることが理想だと感じています。公共交通を維持するためには、市民がまず公共交通に乗ることが重要であり、皆で努力することが必要と感じています。

▼【第二部】パネルディスカッション⑥（会場からのコメント）

⇒金沢河川国道事務所　桑島 正樹 事務所長：

◇それぞれの立場から、交通に関する今後の課題や方向性についてお話しいただきました。共通しているところは、住んでいる方が、自分たちの街をどうしたいのかを考えて行動することだと感じました。

◇自転車の勉強会にしては、今回は大きなテーマだと感じていたが、大きなテーマを通して将来の街を考える良い場になったのではと感じています。

⇒金沢市議会　荒木 博文 議員：

◇今回の勉強会を通して、住民が自ら動き、環境を作っていくという考え方の重要性を再認識しました。

◇アクティブモビリティを使い、自分自身の体を考えることの重要性も感じました。

⇒福井工業大学　吉村 朋矩 教授：

◇バスの減便・廃線は、全国的な課題と感じています。例えば、バス停にシェアサイクルのポートや駐輪場が整備され、相互補完できるような整備も重要であり、行政の内部でも連携が必要と感じました。

◇庁内でも協力していけば、子供たちに良い公共交通を引き継いでいけるのではないかと感じています。

▼【第二部】パネルディスカッション⑦（三国コーディネーターのまとめ）

◇５年後、10 年後を見据えて、金沢市の未来を色々な方が話し合える機会を作ることが重要と感じています。

◇上田市では、千曲川の氾濫による水害も影響して、2021 年よりゼロカーボンをテーマにした＜上田リバース会議＞（立場の垣根を越えた学びと対話の会）を開催、これまで 18 回、延べ 2,000 人以上が参加し、様々な議論が行われました。交通まちづくりにも、大きな政策提案がなされたとのことです。

◇金沢市民は、金沢を想う気持ちが強いため、上手く仕掛ければ実りある会議や勉強会が開催できるのではないかと感じています。

▼会場の様子